

研修報告書 No23

・ 県外在住医師から見た高知の地域医療の状況

私は 2012 年 4 月に、高知県の中西部にある、〇〇町立〇△病院で研修した。

〇〇町は人口 14044 人、世帯数 6233 世帯、65 歳以上の高齢者数は 4540 人、高齢化率は 32.1% の町であった。〇△病院は〇〇の地域医療の中心であり、自分が地域病院に抱いていた想像とは違っていた。画像検査は CT だけでなく MRI までとることができ、透析室、手術室も院内にあった。高度の治療が必要な急性期疾患は高知市の病院へ搬送するが、それ以外の疾患は診ることができる病院だった。施設入所者への訪問診療や、車で 20 分ほどかかる家への往診も行っていた。研修中、△△町の△▼診療所でも 3 日間ほど研修した。こちらは診療所なのに入院ベッドがあり、CT・超音波検査も行えた。

高知県は全国でも高齢化率が高い県だそうであり、実際その印象を強くもった。90 歳代、100 歳代のお年寄りも多く、その分医療介護の人材が必要になるはずであったが、医療スタッフに若い年代の方はほとんどいなかった。高知県全体がそうなのかもしれないが、若者の多くは県外に出てしまっているようである。これから先より高齢化が進んでいくなか、現在の状況では十分な医療・介護サービスを提供することは非常に困難であろうと感じた。

私には具体的には延べられないが、地域にスタッフが集まるよう、医療教育システムの構築や給与・待遇面での充実などが必要になると思われる。

・ 研修内容に関する意見

今回の研修は基本的には内科の指導医の下について入院中の患者をみるものであったが、研修期間中は大学病院では経験できないような予定が毎日組まれていた。訪問診療や施設訪問、検査室での超音波検査施行やリハビリ室・栄養科での実習などである。病院全体を見てほしいという考えだからか、各部署のスタッフの仕事ぶりをみることができた。これらは規模の小さい病院ならではの研修であり、普段は意識することの少ないチーム医療を今回は強く印象づけられた。現在の研修内容は非常に有意義であると考えている。

・ 今回の臨床研修で得たと考えられるもの

研修前から想像していたが、やはりどんな疾患でも診る総合診療が地域医療では必須であるということが実感できた。内科に関しては全般的な知識が必要であり、大学病院での専門的な知識でなく幅の広さが求められた。私は将来的には内科全般の管理ができるような医師になりたいと考えているが、研鑽をつみ何年後かに地域医療に貢献することも選択肢の一つとして考えたいと思った。

また今回強く印象づけられたのは、患者の疾患だけでなく社会的な面まで考えた医療であった。患者の住環境や介護する家族の存在まで考慮したうえで退院可能かどうかを決める。大学病院ではソーシャルワーカーなどの職種の方に転院の調整など行ってもらっていたが、ここでは医師がそこまで考慮して治療を行っていた。この点は、今後の臨床研修でも見習っていくべき点であると考えている。